較を試みることにする。この場合の数値として，各課程の成績の全国のそれに対する成績の百分比—到達率—を用いる。

1，日本史では，各課程ともその数値は 100以下，すなわち全国平均以下の成績であるが課程相互の比較では工業，商業がよく，家庭が最も悪い。

2，人文地理では，全国との関係は，日本史とおなじであるが，課程相互では工業，農業，商業がともに90%台である。

3，化学は，工業，農業，商業の 3課程はともに全国平均以上の成績を示している。

日本史，人文地理，化学の 3科目を通して家庭課程はすべて86未満で最も悪く，次いで普通課程の92未満となっている。

3表　科目別・課程別の到達率

科目＼課程	普通	農業	工業	商業	水産	家庭
日本史	88.3	88.5	97.3	97.0	—	73.0
人文地理	89.2	92.1	98.2	90.7	—	83.0
化学	91.1	104.2	105.4	104.1	—	85.2

c，本県の成績

以上は課程別の成績の比較であるが，次に全課程，すなわち県全体の成績についてみることにする。

標本から推定される本県の成績は 4表のごとくである。

推定値からみた本県の全国的な位置づけはどうか。標本調査であるがため直接数値の比較はできない。そこで本県の標本を全国という母集団からの標本と見做した場合，その成績がどのような範囲にあるべきかをみて，若しその範囲内に本県の成績が位置づけられていれば，本県の成績は全国なみの成績であると解釈する方法を用いる。

このような範囲は 4表の信頼区間に示したごとくであって，本県の平均は区間の外で然かも成績の低い方に位置づけられている。

4表　科目別の国・県の成績

科目＼項目	全国 平均	全国 標準偏差	県 平均	信頼区間 信頼係99%
日本史	54.0	19.2	49.6	53.3～54.7
人文地理	41.5	11.8	37.5	41.1～41.9
化学	37.6	19.3	35.8	37.0～38.2

全国学力調査のための教科は従来 3個年の周期をもって実施されてきた。従って本年度とおなじ教科は32年度に実施されている。そこで32年度の成績に比らべて35年度の成績はどうであったかを各年度における本県の相対的な位置づけから検討してみる。

相対的な位置づけを示す数値に，学力偏差値を用いると，5表のようになる。

高等学校の教科はいくつかの科目からなっておるため，テスト教科が同じ社会であってもその総べての科目について実施されていないため，表にみられるごとく科目相互の比較のできない場合も生じている。然しこれも教科についての標本調査であると見做せば，社会は全国並みの学力の向上を示さず，化学は全国並みの学力の向上を示していると解釈することができる。

5表　科目別学力偏差値

年度＼項目	社会科 社会	社会科 日本史	社会科 人文地理	理科 物理	理科 化学	理科 生物	理科 地理
32	49.6			44.3	47.9	49.5	49.1
35		47.7	46.6		49.1		

d，学校単位の成績

各高等学校への進学者による学校差は，ここ数年らい一応安定して来ているこのような中学校からの進学者の成績による位置づけと，全国学力調査に表われた成績による位置づけとの間に，どのような関係が存在するであろうか。

日本史，人文地理については選抜学力検査の社会の成績と，又化学については理科の成績との間の相関を求めると 6表のようになる。

6表　入学時と全国学力調査の成績との相関係数

	日本史 P	日本史 R	日本史 T	人文地理 P	人文地理 R	人文地理 T	化学 W	化学 X	化学 Y	化学 Z
相関係数	0.82	0.79	0.87	0.44	0.65	0.78	0.66	0.64	0.82	0.90

註　P＝前学年までに 4単位または 5単位履習ずみのもので，全単位を 1個学年の履習したもの。

R＝ 3単位履習する生徒で，前学年までに履習ずみのもの。

T＝最高学年ではじめて履習するもの。

W＝ 5単位履習する生徒で前学年までに履習ずみのもの。

X＝ 3単位履習する生徒で前学年までに履習ずみのもの。

Y＝最高学年と他の学年とで分割履習するもの。

Z＝最高学年ではじめて履習するもの。

日本史及び化学は人文地理に比しその相関係数が大きく相関度の高いことを示している。

回帰直線からのづれの程度からみて，入学当時の成績から予測される成績より，全国学力調査の成績が極めてよい学校が見られると同時に，入学時の成績から予測されるものより極めて低い成績を示している学校がみられた。